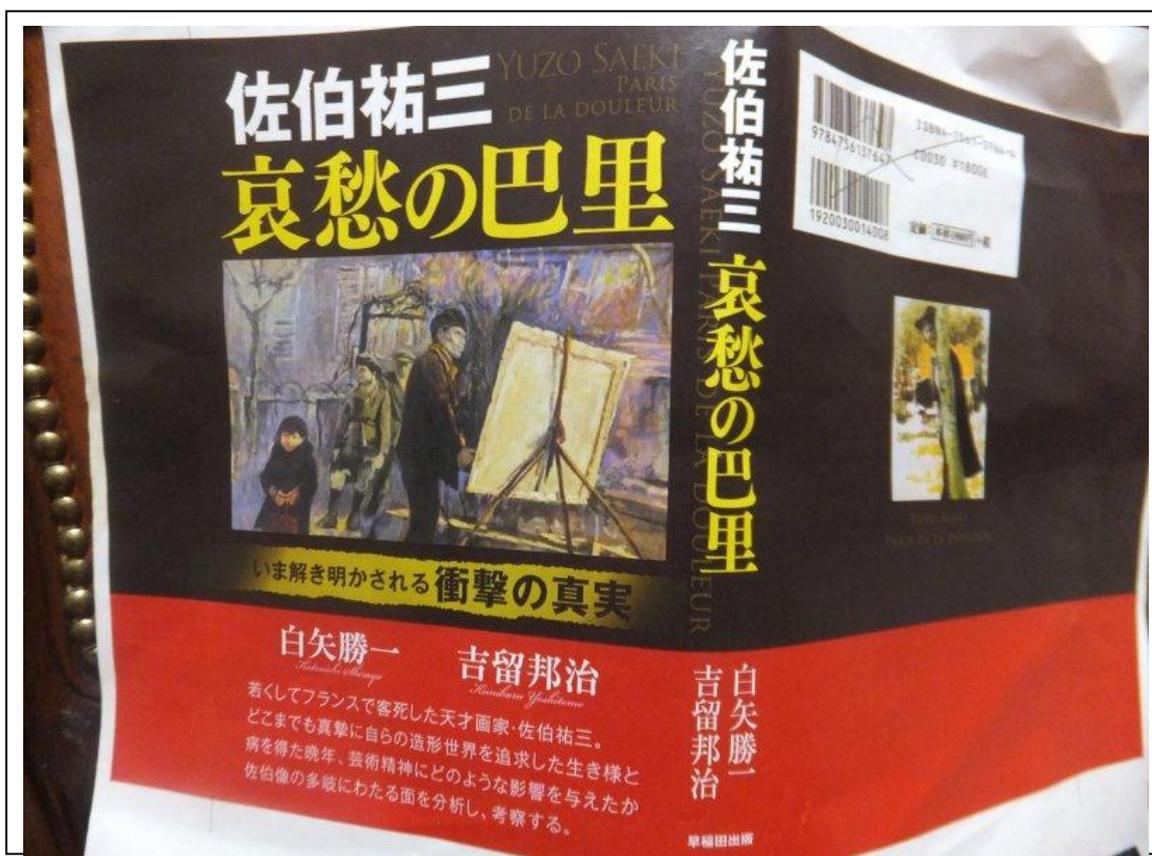


乞うご期待！「哀愁の巴里 佐伯祐三 衝撃の真実」堂々発売予定。これには今まで書かれなかった佐伯祐三が書かれている。筆者（私）はプロの画家ではないが、油絵には長年親しんできた。



六本木の新国立美術館に14点、絵を出した。今までも上野、六本木にだしてきた。たいしたことはないが、落合氏よりも絵画には親しんできたつもりである。

今回のものは習作が多く、まだまだいい絵は描けないことは実感している。

また、モランでの佐伯を油彩にした。これを「哀愁の巴里」の表紙とした。白黒写真をもとに描いたものである。

本当は佐伯の後ろに米子夫人がいるのだが、構図上彼女は佐伯の後ろに隠れていることにした。

筆者の弟、健二は佐伯と同じ病である。

心優しい彼であるが、この世の矛盾についていけない。

彼が筆をとれる時の絵も「哀愁の巴里」のカラー版に、生きていた証にその名を残せるように載せることにした。

健二の絵は彼しか描けない閾値に達している。ただ20点くらいしか描かないで、今も苦しんでいる。



『天才画家「佐伯祐三」真贋事件の真実』（落合莞爾 初版 1997 年）を見て怒りを感じた。嘘をつく前に裁判で控訴すべきではないか。

どれだけ人を騙し、佐伯を愚弄するつもりか。これが許されていていいのだろうか。

あれこれ文句を言う前に敗訴した裁判に対し控訴すべきであろう。

氏は自ら絵を描いたことがあるのだろうか？許せないHPである。

医師、芸術家に対する冒涇である。落合氏の履歴が東大法学部卒となっているが、削除すべきである。大学に対しても申し訳ない。

確信犯である氏は控訴して戦えば、先輩として尊敬できるが、

学術論文というものは、その根拠、出典を明らかにするのが常識である。著者は学会によく出席する。氏の説はどこに行っても相手にされないであろう。詐欺罪で有罪となるような人物のワープロによる吉蘭資料、これをもとにして書かれた氏の資料は、誰にも相手にされない。

例えば芥川龍之介、佐伯祐三、佐伯米子、外山卯三郎、その他大勢が草だったという証拠はどこにあるのか！その根拠は他に一切ない！

佐伯の真実を知っていただきたい。この本は佐伯の墓前にささげるものである。

佐伯祐三は命がけで自分の絵を探し続けた。

その生きざまは身震いするほどだ。

親しい人の死に接し、死を極端に恐れた。死と生をつなぐものは仕事、すなわち絵を描くことであった。

自分しか描けない絵を描くこと、荻須、大橋、横手など佐伯と同じような絵を描いている。

後輩に自分の絵の描き方を惜しげもなく教えたのである。
彼の後輩たちは佐伯と同じ堅固（色彩）なパレットと筆を持つようになった。
里見やブラマンクの教えを忠実に後輩たちに伝えたのである。
賢明なる諸子に再確認していただきたい。
インターネットで彼らの絵を見ることができる。
佐伯は新しい絵を描くために冬のモランに、誰も描けなかった自分しか描けない絵を求めて... 絵画で重要なことは人まねではない自分の絵を描くことだ。人まねであったとしたら、その人以上の絵を描くことだ。
落合氏は米子の加筆をうんぬんしている。それでは佐伯の後輩たちの絵を米子が加筆したというのだろうか。
いったい何を目的にしているのか？
佐伯の壮絶な人生、真剣な絵画への取り組みを詐欺師の作ったたわごとで汚してしまう。これは許されない。
落合氏は小林頼子や裁判官を批判している。そうであるならば筆者も真実を語らなければならぬ。落合氏に反論しなければならなくなった。
医学と芸術は同じ性質を持っている。どこまで行っても終わることがない。真実の追求を目指しているのだ。
佐伯は問う、「これも純粋ですか？」
純粋を突き詰め、その死もいとわなかったのである。
多くの有名人をなんの証拠もなく、草としてしまう。
死人に口無し。彼らは抗議することができない。大谷 佐伯 米子 外山、芥川龍之介、あげればきりが無い。
なんで彼らがスパイ？どこにもその証拠はない、ただ嘘を勝手に書いているだけである。
大谷門下、芥川の係累に訴えられたらどするつもりであろうか。もっとも賢明な人間は、こういう卑劣な人間を相手にしないであろう。これを相手にする著者はまったくの阿呆かもしれない。
吉蘭資料を書いた人物は、その知識を見せびらかしたい愉快犯である。
歴史や絵画についてその知識を披露したいのだろう。
だから、とてつもない有名人が次から次へと登場する。その代理人となったのが落合氏である。歴史をゆがめ、佐伯祐三を愚弄する。
言いつばなしは許されないことである。
それに加担する輩も佐伯の家族、佐伯の係累、佐伯ファン、真剣に画業、医業に取り組む人々を足蹴にしているのである。
佐伯祐三展は時を越え場所を変え、行われるが、彼ら詐欺師軍団が表にでたことがあるだろうか。
こういう嘘をまともな美術館はハナから相手にしていない。しかし著者は黙認できない。無視して馬鹿か！という態度だけではすまされない。インターネットの世界では、なんでもOKである。これは仕方がないだろう。
自由と画布、佐伯のパリ日記、落合氏の本、佐伯祐三の妻米子、ここまでは、まったく大ウソである。

武生資料、中島裁判、二人の佐伯祐三をじっくり読んでいただきたい。詐欺師はもっともらしいわかりにくい文章で説得力をもたせる。

論点をそらすためだ。なにがいいたいのかわからないうちに読者はたぶらかされてしまう。それをわかりやすく書いているのが、一流会社に勤務する自称、北斎、斉藤氏である。ともに大きな社会的責任を負うことになるであろう。

落合氏の本を出した大手出版会社は、白黒をつけるべきである。

裁判で贋作と結審されている。公的機関としてこれを黒としたならば自主回収すべきである。

トヨタ、パロマなどは自社の製品に問題があれば、それなりの責任ある立場を明確に示している。出版会社としての見解を明らかにすべきである。

武生資料、中島裁判などについて、白矢眼科HPの「院長ゼミナール」に少しずつ書いているので参考にさせていただければ幸である。HP担当者の多忙のため、誤字が多々認められるがしばらくの間お許しいただきたい。また、資料を今後も追加していく予定である。もうすぐ出版される「哀愁の巴里 佐伯祐三」には、贋作事件は、少しだけ取り上げる。つまらない嘘を真剣に取り上げれば品位が落ちる。なにも詐欺師や愉快犯を持ち上げる必要はないと考えるからである。

なぜ嘘か、その2、3を紹介しよう。私は単刀直入だ。ずばり真実を語る。異論があれば反論していただきたい。

1、米子の加筆は佐伯祐三がメニエル病であったため、遠近感のない、ハエの眼、馬の眼となり、まともな絵にならなかった。そのため、米子が佐伯の絵にガッシュで加筆し売れる絵にしようとした。

これはまったく医学的には根拠がない。まずこの医学的根拠を示すのが筋であろう。いかに周蔵の生きていた昔とは言え、こんないい加減なことは放置すべきではない。これをそのまま通すならば、厚顔無恥といわれても仕方あるまい。早かに修正すべきであろう。

2、佐伯は学生時代から吉園周蔵に精神的、金銭的援助を受けていた。親、兄弟から疎まれていた。

佐伯は愛情につつまれ、その愛を失うのが怖い、そして愛のある生を求めたのである。仕事つまり絵を描くことはその生を営み、生活を保つ大きな柱であった。

また佐伯の生家は大きなお寺であり、たいへんお金にはめぐまれた環境にあった。兄より遺産分けとして東京に出てくるときは大金を持っていた。フランスに行くときも十分なお金は持っていた。フランスにいる佐伯に兄は送金していた。

兄にお金を送ってほしいという祐三の手紙も残っている。周蔵の麻薬売買による金など一切受け取っていない。

周蔵が国家のスパイであったという証拠は吉園資料以外にはなにもない、佐伯評伝には一切周蔵はでてこない。周蔵はただの、その辺にいるおじさんであった。

周蔵の親戚が週刊誌でそのことについて述べている。

贋作かもしれない絵を何億という金で売り渡したことが多々あり、なおかつ、詐欺罪で有罪となった明子氏の言う事とその親戚筋が話すこと、どちらが正しいと感ずるだろうか。

落合氏は、その著書およびHPでは、裁判官や小林頼子など、まともな正論を攻撃し、吉園側の不利な点については、むちゃくちゃな論理を振り回して人を煙にまく。

世の中には大きな常識というものがある。

この常識は小説や絵画、映画の世界では覆したほうが面白い。

しかし、現実の社会での常識破りについては限度というものがある。いったい、ご自分が何をしているのかわかっていらっしゃるのか。

賢明なる諸氏ならご理解いただけると思うが、国家の草が画家になってなにをするのか。落合氏によれば草が絵描きになったという話だが、佐伯が草として何を国家のために行ったのだろうか。馬鹿らしい話を信じる人が増えるのを喜ばれているのだろうか。

草などそう簡単になれるものではない。草になるためにはなにか目的があるはずである。佐伯が草になってなにをしたというのであろうか。

著者は戦後生まれであるが、多数の戦前の人間との付き合いがあった。しかしそのようなスパイがいたという話は聞いたことがない。落合氏によれば、周蔵ほど魅力的な人間はいない、一切その本当の姿を見せなかった。すばらしい人間であるということだ。

自分を隠して表にでなかった、そうではない。もともと裏の世界などにいたのではない。ただの「おっさん」にしかすぎなかったのである。

すべて作り話なのだ。落合氏自身もその存在を明らかにできないだろう。まったく根拠のないでたらめを真実のように見せるとはご苦労なことだ。

佐伯の精神異常はモランからパリに帰ってきてからである。

雨の日にカンヴァスをもって出かけたため、風邪をひき身体を壊して寝込むようになってからだ。

「巴里日記」、「自由と画布」では若い時から精神異常予備軍と医師？の周蔵がカルテらしきものに記している。

話の出発点からして間違っているのだ。

3、吉園明子による「自由と画布」、匠編著「佐伯祐三の巴記」は重複部分はいくつもある。たとえば新宿中村屋の相馬さんの件である。「巴里日記」ではこの辺りは明子氏のワープロ稿がもとになっている。

落合氏は場当たりの言葉を変え、言い訳的なことを書き、ごまかそうとするが、それは無理というものである。

氏は二元論なるHPを新たに張り出されたが。ここでは前言を翻している。「自由と画布」は伝聞、「巴里日記」は匠が書かせたものだから、まともに取り上げるのがおかしいと書かれていた。

ところが二元論においては裁判で敗訴したのは「巴里日記」を裁判官およびご自身が重視しなかったからだとまったく逆になっている。一貫性がない！「自由と画布」と同じである。佐伯に与えたという周蔵の金の出所はころころ変わる。

虚偽や不可思議な点はこれだけではない。矛盾につぐ矛盾、恥の上塗りの羅列である。

4、米子と知り合う前の佐伯の絵は佐伯のみの手によるものである。その絵はまだ彼自身の個性は探し切れていないが、絵を描くことを知っているものが描いた絵である。

諸氏に「巴里日記」に載せられている佐伯のデッサンといわれるものを見ていただきたい。

確かに絵画は主観的であり、へたは下手なりの味がある。

ゴッホでさえ、認められるのには時間がかかった。しかし、「巴里日記」にでてくる絵は、一見それらしく見えるが、よく見ればただそれだけである。

佐伯の絵をまねているだけで心がない、なさない絵である。

さて吉蘭側は米子に加筆したというが、いったいどこに加筆したというのだろうか。

佐伯の模写をして感じるのは、彼の絵にはリズムがある、ひびいてくるものがある。佐伯の呼びかけが聞こえてくる。細やかな神経、隅ずみまで気を配った跡がある、

しかし。大胆、線と色彩で完璧にまとめている。

彼らの言う加筆とは細い線のことをいうのだろうか、ちょいちょいと加筆してできる絵ではない。

色面に、猛烈なスピードで線を描く。

佐伯の早描きはそう簡単に真似ることはできない。

細い線をどうやって描いたかはモランと一緒にいった山口長男等が記している。

筆者も、この方法を用いて模写をしている。細い線は細長い筆を使い、おつゆたっぷりで描くのだ。

展覧会でよく見ていただきたいが、佐伯の絵には筆を引きずった跡が認められる。米子に加筆したというなどともない話である。

5、落合氏の書く文章の多くが明子の持ってきたワープロ原稿がもとになっていることである。武生市でも問題になったが、資料としてはまったくお粗末なものである。

調査室が求めても明子氏は現物を出さない。

これについては、氏の本にも「明子氏のワープロが届く」と明確に書いてある。資料そのものが、都合良く作られた可能性が高い。

6、中島裁判の判決で贋作とされ吉蘭側は敗訴。この裁判結果はとても大きいものだ。多くの事実、証言を積み重ね、裁判官の責任をかけての結審である。知人である弁護士によれば、裁判官の威信をかけてのものであるということだ。

もし、氏が不服と感じるならば、インターネットの世界で裁判官等を非難すべきでなく控訴すべきである。裁判官はプライドを賭けて結審したと思う。

プロはそれなりのプライドがあるものだ。氏に真実の心があるならば、やましいところがないのであれば裁判でもう一度堂々と持論を展開すべきである。

それをしないなら控訴しても敗訴するからしないと思われてもしょうがない。

詐欺事件を起こした吉蘭明子をいつまでも擁護し続ければ、彼女からなんらかの受け取りがあったからと邪推されるだろう。

このままインターネットを使い世間を惑わし続けるのは罪なことだ。吉蘭佐伯が本物と主張されるならばもう一度裁判すべきである。

それをしないならHPを潔く引っ込めるべきではないか。

そうしないならば恥知らず、卑怯者、大嘘つきと思われてもいいと認めることになる。

筆者は落合氏がそういう人物でないことを願っている。

ぜひ裁判で再度戦っていただきたい。

ご自分の信じるように筋を通すのが男らしい生き方と示してほしい。女々しい態度はとってほしくない。

賢明なる諸氏は冷静に、しっかり見ていただきたい。

佐伯祐三はその人生を賭けて絵を描いたのである。自分の絵の追及のために命をも惜しまなかったのである。

単なる小説であれば問題ないが、史実のように書かれている。それをいちいち間違いであると指摘する筆者は自己嫌悪に陥る。

もともとこんなことはしたくないのである。

しかし、これを放置すればあまりにも佐伯祐三一家がかawaiiそうである。日本の誇る偉大な画家の名を辱めないよう、やむなく書き続けることにした。近いうちに「巴里日記」、「自由と画布」、武生資料などについてお知らせする。

下記は佐伯の絵が米子によって加筆されたと、杉浦氏の談によって落合氏が示したものである。なぜ杉浦氏がこのように書いたかは、高い相談料によるものではないか、と邪推されてもしかたがあるまい。氏は都合のいいことだけしか書かない。しかし、すべてぼろがでる。つまり真実ではないからである。

「杉浦が佐伯祐三の作品を修復したとき感じたのは、根底は激情型の太い線で荒々しく描かれているが、その上に面相筆のような極細の線で、細かい仕上げがなされている。「もし、これを1人で描いていたら、佐伯祐三は極端な二重人格に違いない。そんな二重人格が居るんかいな、かねがね、そう思って不思議だったんですが、今回の吉蘭さんのものを見て、『ああ、やはり出るべきものが出てきたな』と納得できたんです。

「これは壁の絵ですかね・・・この壁の文字は斜めに描いていますが、こんな字を、イーゼルを立てたまま現場で書くことは、物理的にもだいいちムリです。誰でもアトリエで床に敷いて落ちついて描く。これもそうして書いたもの。』」

裁判で、米子と知り合う前の絵と贋作が比較されている。米子と知り合う前に描かれた絵は、絵をよく知った、才能あふれる絵画である。それに比べ贋作は味噌くそもないへたな絵であった。

絵をよく知り、自ら修行したものであれば、ご理解いただけると思うが、それなりの人間が描けば、いつ筆を置いても（描きかけでも）絵になっている。

佐伯の線についてはすでに述べたが、細長い筆を使って下絵が乾かないうちに描いたものである。

「こんな字を、イーゼルを立てたまま現場で書くことは、物理的にもだいいちムリです。誰でもアトリエで床に敷いて落ちついて描く。これもそうして書いたもの。」とはよくこんな馬鹿なことを言ったものである。

ただ一人の修復家の言ったことを、そのまま調査もせず書いている。杉浦氏のいう「壁の絵」については私も模写したことがある。床になど置いて描いたら、よけい描きにくい。絵画をよく知らない氏がいろいろ人の説を取り入れ、微に入り細に入り述べられるが、もともと無理がありすぎる。

ここまで来ると怒りを乗り越えて哀れである。

私は乾いた油彩にガッシュで描くことを試みた。黒は特に油の上に乗らない。ガッシュで黒い線を描くことはできないと思う。

知り合いの画家に、これがもう一度できるかどうか試みてもらうつもりである。たぶんできないだろう。氏はあたかも見てきたような嘘を平気で書く。小説なら問題ないが、あまりにもひどすぎる。氏は絵画について、知識があるように書かれているが、いったい誰の受け売りなのか。実際に米子が加筆したというなら、その実演を見てみたい。

修復する場合、まずテレピンでニスをはき取る、ガッシュで描いてあるならば、その線は

消えてしまうのではないか。どういう風に落合氏は考えておられるのか。
詐欺罪で明子氏は有罪となった。その時まで、贋作らしい絵を売り、大金を得ている。それは以下のように邪推されても仕方がない。落合氏はその頃、すでに明子とは付き合いがあった。落合氏もその売買に関係していた。これは本物ですよと氏が買い手を紹介する。手数料として大金を受け取る。氏がなぜ嘘を書きつづけるのか？
本物と主張し続けなければならない立場に置かれてしまったからではないか。そう邪推されてもしかたがないということである。筆者はそのようなことを落合氏がするはずがない高潔な人間であると思いたい。
詐欺事件に氏が関わっていたならば、その買い手が文句を言ってくるはずであるから、多分そのようなことはないと思いたい。
しかし、必死に嘘を書きつづければ、そういう買い手に対するポーズとも考えてもいいかも、と考えてしまう。
裁判で敗訴しても控訴という手があった。これをしなかったのは、自ら敗訴を認めたということである。これは判例として残る。
裁判官も困ったであろう。無いということの証明は困難である。またへたな絵でも佐伯が描いたと言われれば、その証明は科学的証拠だけでは弱い。
佐伯か、贋作者が出てこなければ、証明が難しい。
しかし、まともなものは、それなりの人間にはわかる。
もっとまじな贋作者にまかせれば、少しは有利になったであろう。

